

あどけない女優

戸板康二



新評社

あどけない女優

戸板康二

新評社





あどけない女優

著 者 戸板康二

東京都品川区荏原 7-17-19 郵便番号 142

発行者 御喜家康正

発行所 株式会社 新評社

東京都中央区銀座 5-6-12 郵便番号 104

電話 (03) 573-4611(代) 振替 東京 0-56880

印刷所 三晃印刷株式会社

製本所 中島製本株式会社

©戸板康二 1978

(落丁本・乱丁本はお取り替えいたします)

Printed in Japan

0093-03014-3337

SHINPYO MYSTERY COLLECTION

あどけない女優 ■ 目次

SHINPYO MYSTERY COLLECTION

意外な幕切れ 7

鬼っ子 25

四月吉日 73

ぬき稽古 89

光の輪 115

脇役の万年筆 145

あどけない女優

ナンシーの老女 169
193

盗み聞き 213

内助の功 239

あとがき 269

SHINPYO MYSTERY COLLECTION

あどけない女優

装幀■本間憲一

意外な幕切れ

門まで夕刊をとりに行った小森与吉は、書斎の隅に置いてあるデッキ・チェアに横たわると、その新聞をひろげた。

ラジオ欄の脇に、外山孝の立ち姿の写真が出ている。小森と外山がもう六年も続けてきた劇団鈴で今上演している「痴者の声」の劇評が、その写真のまわりに組まれている。

この新聞で新劇の評を書いているのは、小森が渋谷の酒場でよく会う若い記者だった。小森の劇団には好意を持っている青年だが、きょうの劇評は、手ばなしで賞めている。

「痴者の声」は、近ごろ見たどの舞台にもまさるものであり、戦後の新劇の中でも、これほどの幕切れはないだろう、とある。

多分四、五年前に大学を出たにちがいないこの記者が、戦後の新劇の中でなどと書いているのはおかしいので、それは多分、芝居を見て感動し、昂奮のあまり、オーバーな表現に走りすぎたのにちがいない。

小森は自分の書いた「痴者の声」が、初日以来誰に会っても絶賛され、きのうも三紙に出ていた劇評が、筆をそろえて、「この秋最大の収穫」「外山のすばらしさ」「申し分のない幕切れ」という見出しを出したりしているのに、なぜそれほどうれしくないのかと、自問自答してみた。

じつは、たずねてみる必要はないのだ。小森は「痴者の声」の評判がいいのに、気が滅入って仕方がない理由を、ハッキリ知っている。今自分が陥っている不機嫌は、稽古の進んでいる最中から、すでに予感されていたのである。

それは、この作品で、主人公の三郎という、頭の弱い農夫の役に扮した外山のうまさ、作者であり演出者である小森のイメージをはるかにうまわるほど、見事なものだったからだ。「またこんども外山だけがほめられるのだ」そう思うのは、小森にとって愉快ではなかった。

小森と外山は、戦争直後にR大学の英文科を同時に卒業した、十数年来の親友である。お互いに、私生活についても、何でも知りつくしているつもり、深いつきあいだ。

七年前に、小森は、妻のゆう子と結婚した。ゆう子は、大学の正門の前にある本屋の娘で、学生の頃から、しじゅう行っていた店だから、向うが少女の時代から知っている。

学校を出てから、教授に紹介された出版社でしばらく翻訳の手伝いをしたりしていた小森は、そういうかたわら戯曲を先輩に指導してもらい、同じ先輩の肝いりで、文芸雑誌に二つほど長いものを発表したが、その二つが二つとも、批評家の目にとまり、かなり大きく時評に扱ってもらった。それが、小森に、作家として進む決心を与えたといってもいい。

外山のはうは、小森が結婚する前から、塑像座そざうざの養成所で、俳優になろうとして、かなり熱心に勉強していた。小森がゆう子と世帯を持った頃、一時外山は京都に行って、映画のつまらない役に出たりしていたが、たとえば戦国ものの野武士で、群衆のひとりとして画面をスーッと横に通るといような役で、ちょっと顔を出すだけなのに、何となく人の心に残る余情を感じさせる、ふしぎな持ち味があった。

ある時、京都で英文学会があるので、久しぶりに出席する気になった小森が、会の終わった夜、四条河原町を歩いていると、外山に会った。その晩、飲んでいるうちに、小森が「映画なんかやめて、東京に出て来ないか」というと、外山は、しばらくだまって考えていたが、「君と二人で

劇団をはじめるといふ条件なら帰ろう」といいだした。

「条件」といふ言葉を使ったのは妙で、東京に帰るのを、へんに恩にさせていうじゃないかと小森は思ったが、酔っている頭の中で、なるほどこの男を主演俳優にして、自分が作品を書いたら、今までの新劇の世界にない、独特の劇団になると思った。

そして、そう思ったのがまちがいでないことは、それから何やかやで半年以上のちに旗をあげた劇団鈴が、現在まで六回持った公演が、まず大体うまく行っていることでもわかる。

経済的にも、何のバックもなしに、小森個人の資金ではじめたのに、もう三年目に赤字を解消したのはめずらしいほどの成功といつていい。

しかし、成功といえど、芸術的には、劇団鈴がたった三年で、高く評価されたことであつた。それはこの劇団に、創立以来毎回小森の書いて来た戯曲が、それぞれ問題を提示する傑作といわれ、作家としての彼の位置を確立したこともあつたが、それ以上に、じつは外山という俳優が作品をつねに演じ生かしたという風にいわれて来たのも、事実であつた。

外山孝は、第一回公演の「壺の思想」で、老いたる陶工に扮して、その年の演劇記者会賞を受け、その以後「三つの疑問」で若い新聞記者、「故郷の墓」で麻薬中毒の土工、「古い手紙」でテノール歌手、「黄色い風」で軍人と、年齢も階級も環境もまるでちがう役柄を次々に手がけ、どの役にも、すぐれた演技を見せた。

むろん、小森が外山という俳優の素質をよく知って書いたためもあり、三回目の公演あたりからは、自分の書く人物を外山がどんなふうにしらえあげてゆくかという興味を持って役を工夫したのもほんとうである。

いわば作家と俳優の一騎打ちのようなのだが、小森は、公演のたびごとに、外山には舌をま

いた。いつも、やられたと思うのだ。

卓を囲んで出演者が役の研究をするいわゆるテーブル稽古の期間までよくめ、毎公演、稽古には約二カ月費したが、初日が近づく二週間ほど前には、もうその役の人間になりきっている外山が、劇団のスタジオに出て来るたびに、少しずつ手直しをし、練りあげてゆく段階を見ている小森は、時々腹の中で、「作者冥利」という言葉を思ったりしていた。

自分の書いた人物、自分の考えたセリフを、こんなにうまく表現する俳優がいるというのは、たしかに幸福だと思うのだ。

しかし、そういう幸福感のかげに、自分の作品よりも俳優の演技のほうに、二倍も三倍もほめはやされることに対しての嫉妬が潜在しているのを、いつも痛いほど小森は自覚していた。

こんどの第六回公演では、「痴者の声」という作品で、外山を精神の薄弱な農夫にした。その農夫の前で、都会から来たゴールド・ラッシュの夢を持つ利権屋が争って、二人とも崖から落ちて死ぬという大詰最後の幕切れに、それを呆然と、だまって見ているというポーズを、外山に考えさせてみた。

舞台稽古の日まで、この幕切れには、さすがの外山も思案が浮ばないと見えて、苦労していたが、初日に、いつも鈴が使う平河ホールの一階席のうしろの壁に立って、小森が見ていて、アッと声をあげた。

大詰の幕切れに、小森は、

「三郎は二人の落ちて行った崖の下をのぞいて見ようとしなさい。ぼんやり立っている。しかし、その顔には、一種の感じがある。何を考えているのかわからないが、一種の感じがある。——幕」と書いた。

外山は、その「一種の感じ」を——小森がつかもうとしてつかめずにいた感じを的確に示したのだ。二人の男が崖を落ちてゆく。立っている外山の三郎の顔が、今までの痴者でなく、一瞬二分の一秒ぐらい、正常な知能を持った男のように見えるかと思うと、下くちびるをわずかにつき出し、それから上目を使って、客席のうしろの壁のあたりを見たのである。

ちょうどその目が、暗い中にいる小森の方に向けられたが、この幕切れは、作者の考えもつかないもので、改めて感心させられた。

作者と俳優のあいだの、創造過程のそんな微妙な心持の綾あやは、批評を書くものにはわからないが、この幕切れは誰にも感銘を与え、作者が狙った批判的な主題の意図も、そのおかげで、ズバリと示される結果となった。

劇評は、どれも、この幕切れの外山を、大きくとりあげていた。今度も外山には降参したと小森は、はじめ苦笑していたが、会う人がみんな作品について何もいわず、外山ばかりをほめるのを聞いているうちに、だんだん不愉快になって来た。

過去五回の公演では、こんな気持にまではさすがに追いやられなかったが、こんどは、腹が立ってならないのである。

きのうは三日目だったが、塑像座の俳優たちが揃って見に来て、帰りに女優の高畠みどりは、小森を見ると、「外山さん、すごいじゃありませんか、もうあの人、名優といってもいいわね」といった。

大先輩がこんなことをいっても、皮肉とは聞こえない。小森としては、「ありがとうございます。外山にそうやってやりましょう。きっと喜ぶだろうと思います」と返事するはかなかった。

家へ帰って夕刊を見ると、どの劇評も外山、外山、外山で、中には、作者の小森の名前を書き

落した新聞さえある。

きょうは、二幕目から見ると劇団には通じてある。たまには、家の食事をしたかったので、七時に出かけることにしているが、今夜の夕刊の劇評が、またしても、作品の出来に一言もふれず、外山孝の三郎のことで終始しているのを読むと、心はおだやかではなかった。

デッキ・チェアから身を起して、煙草をケースからとりあげ、ライターをさがしているところへ、ゆう子が入って来た。

「外山がまたほめられている」といいながら、夕刊を渡すと、ゆう子は、「そう」と、素っ気ない返事をした。

もともと、愛想はよくない女だが、外山にはわりに冷淡である。

小森は、劇団の中で、ちょっと好意を持ちかけた若い女優から、きまって、こちらが好意の片鱗さえ見せないうちに、外山に対する讃辞を聞かされた。

小森は劇団の女優と浮気をする度胸もないくせに、そんな時には、いつも外山を羨ましく思うのだった。

どこへ行っても外山はもてた。もっている外山の前で、苦い酒を飲んだ記憶は少くない。もっとも、小森は、外山が独身だからだという理由を、強いて探しだしていた。

小森は、ゆう子が、外山を好きになったらどうしようと、前から時々思っていた。ゆう子を熱愛しているからこそ、そんな危惧を持つのだが、外山に、自分にはない男の魅力があるのを、よく知っているからでもあった。

だが、外山が訪ねて来た時、ゆう子は、あまり歓迎する様子もない。小森の妹で、チェコの大使館につとめている雅江なんかは、正月にこの家で外山と会ったら、見ていられないほどとり乱

して、有頂天うもててんになった。

そんな時に、ゆう子が、「雅江さんにも困るわね」としずかにいったのが、妹のそんな態度にまでねたましさを感じていた小森には、百万人の味方のような気がしたのをおぼえている。

小森は、ゆう子と、六つになるひとりっ子の信也と三人でゆっくり食事をしてから、平河ホールへ行った。しかし、劇団の主宰者としては、「痴者の声」が好評であるのを、どんな意味にも自祝しなければならぬ。

彼の鞆には、書斎で切りぬいて来た夕刊の劇評がはいっている。それを、きょうも楽屋の壁に貼りだすつもりである。

B

「痴者の声」の公演のあと、三カ月ほどのあいだに、小森は、自分ながらおそろしいと思うのだが、いつの間にか、外山を憎みはじめていたのに気がついた。

それは、外山が三郎の演技で、芸術祭賞をとった頃から、ますます強くなって来ていた気持である。

人が聞いたたら、おろか者とも気がいともいうだろう。親友と二人で結成して、育てて来た劇団の主演俳優が、かがやかしい賞を贈られるのに、苦痛を感じている作家がここにいるといったら、みんな、どんな顔をするだろうと思った。

小森は、外山が芸術的につねに、自分よりも大きく批評され、高く買われていることにも不快を感じたが、個人としても、いつも外山に劣等感を持たされて来た。